OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	他人が「他者」になるとき : 移民研究と「他者」再考
Author(s)	田沼, 幸子
Citation	年報人間科学. 1999, 20-1, p. 229-245
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10008
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

他人が「他者」になるとき：移民研究と「他者」再考

田沼　幸子

〈要旨〉

近年の人類学批判は「他者」概念を政治倫理的に否定し、分析概念として退けた。被調査者の他民族を「他者」と表象することは「認識論的アパルトヘイト」と非難される相対主義に基づき彼らを不利な立場に押し止めることを正当化するとされた。この考えを押し進めると「他者性」は構築されたものであり解消できるはずであるという近年、影響力を増す人類学の見方になる。だが、この考えも、結局現実の他者を表したものではないという批判が出ている。他者の予測不可能な側面をあらかじめ捨象しているためだ。しかし、代わりに提案された「他者」をめぐる議論は、現実の人間と、予測不可能な性質双方に同じ other を当てているため、具体的に理解しにくい。ここでは「他人」という語を導入し、彼らの見解を私の言葉で整理し、人類学的事例に使用可能にする。「他者」とは「他者性」＝境界によって想像される抽象化された「他人」の集合である。境界論は今まで既に名付けられた民族・エスニシティの説明に使われることが多かったが、ここでは名付けのない境界も他者境界として考える。この他者性とは、以前の「我々の現実と全く異なるもの」という意味ではない。ある側面においてあらかじめ予測できないことや理解できないことが「他者性」であり、それが境界となって「彼ら」と「われわれ」を想像させる。境界は視点によって別のものが重層的に現れる（一度にみえるのは一つである）が、一つの境界も可変的である。

キーワード

他人、「他者」、「移民」、境界、名の有無

1. はじめに

「あの人たちとは違う」

一番引っかかったのは、在日ビルマ[1]人のこの言葉だった。1997年の8月から二ヶ月間、私は東京のビルマ人宅に住み込み、夜はミャンマーレストランで手伝いながら修士論文のためのフィールドワークをした。ビルマに関しては全くの初心者である私に、彼らは喜んで自国の文化や歴史、未来の抱負を語ってくれた。在日ビルマ人はおよそ一万人いるといわれている。そのほとんどは本国ではエリート階層に属す、同年代の人口のうち3%足らずの大学卒業者である。にも関わらず、その多くが飲食店のアルバイトを一日中していた。1988年の民主化運動とその武力弾圧の影響だ。政府の逮捕を逃れた者もいれば、大学の閉鎖や職の不足で仕事を求めてきた者もいる。いずれにせよ、独立後に東南アジアで最も豊かだった国から最貧国へと転落したことが国外流出の背景にあり、その根源と見なされる政府への彼らの不満は強い。東京のビルマ人は初対面の私にさえ「これ（他の人に）いっちゃダメよ」と言って「政府」「軍人」（軍事政権）への批判を口にする。『私たちビルマ人は勤勉で分け隔てなく親切で、皆が政府に反抗意識を持っている』…それが彼らの一般的な自己表象だった。ところがしばらくして、具体的に他の在日ビルマ人が話題にあげられたときには、しばしば一転して打ち消しの言葉が返ってくることに気付いた。

「あの人たちとは違う」

「私たちは違う」

「違う」の理由には分かりやすいものもある。例えば出稼ぎか留学か、反政府か現状黙認か、日本語ができるか否か、など。だが、そういった理由はある人たちとの間では「違う」の理由になっても別の人たちとの間ではそうならない時もある。

「違う」わけを客観的な属性をもとにあげていっても、結局一貫したものは残らない。

「ビルマ人は、気に入った人たちとしか付き合わないから」

ビルマ人との付合いの長い日本人がよくいう言葉だ。これはこれで説得力が無いわけではない。ビルマ人自身、いろいろな集まりでどんな人を呼ぶのかと聞くと「気が合う」ことを理由にあげる[2]。ところが「気が合う」人たちとの間にも、「あの人とは違う」の線引きがなされることがある。

初めの単一な「われわれビルマ人」の語りからは想像できない線引きの多さや、きっぱりした線引きの表現の仕方は彼らに独特な傾向であると言える[3]。このような線引きはビルマ人の特性のようにさえ思えてくる。が、よく考えてみると実は線引きのやり方に様々な特徴があるのであって、線引き自体は誰でもしている。つまり在日ビルマ人の言う「あの人たちとは違う」という線引きは、ビルマ人に限らず誰もがしている「他者」としての誰かとの線引き、と考えた方がいいのではないか。そう気付いたのはフィールドワークを終えて一年が経ってからだ。「他者」との線引き、という考えになか

なか思い至らなかったのは、「他者」という言葉の多義性と、この概念を巡る近年の人類学批判の影響が大きい。人類学における「他者」はかつて「異文化」の「被調査者」のことを指していた。「他者」は遠くの〈われわれの世界とはかけ離れた者〉達であり、彼らの文化はわれわれの常識を覆すものと考えられていた。ところが近年、人類学の「他者」は、実は彼らの歴史や政治経済的な背景を看過することによって構築されているという批判がなされた。類似性の捨象によって、「他者」がつくられたというわけだ。「他者構築」批判の影響力は大きく、その後の人類学の研究対象とテーマは、例えば「移民」など類似性を中心にさえ据えたものになった。被調査者について語られる他者性を、積極的に脱構築することを提唱する人類学者もいる。さらに人類学は支配的な構造に苦しむ被調査者が、解放に向かう語りを支持すべきだという意見もある(4)。

だが、類似性によって「他者」はいなくはならないことを、先述した在日ビルマ人の語りは示している。ビルマ人「内部」はもちろん、日本人と在日ビルマ人との間にも強い親近性や類似性がある。だがある面においては互いを「他者」と見なしていると言える。事例から分かったのは、オリエンタリズム的な「他者」構築への批判は正当であるが、類似性や親近感があってもなお「他者」が現れる状況があるということだ。つまり「他者」概念が批判され、異民族間の差異が縮小したとしても、「他者」に関する語りは日常に存在する。この状況を、どうすれば、詳細な民族誌的事実の追求ばかりに陥ったり、テクストにとどまったりせずに、とらえることができるだろうか。

一つの答えとして本稿で主張したいのが、「他者」を予測から逃れるものとしてとらえる考えである。一見抽象的なこの「他者」概念を、具体的な事象―特に移民研究を踏まえて再定義すれば、有効な分析概念として使用できることを提議する。この論考ではまず、近年の人類学における「他者」の否定がどんな根拠でなされるのかを検討し、これらの根拠が「他者」の否定にはならないことを確認する。次に、従来の人類学における「他者」概念とは異なる、予測を逃れるものとしての「他者」とは何かを示し、二つの「他者」の相違点と、後者のメリット・デメリットについて考察する。メリットは、既存の概念や枠組みに囚われない可能性を開くことであり、デメリットは人類学の具体的な事象を扱うには、定義が漠然としていることである。そこでこの「他者」定義を移民研究における「他者」の使用と照らし合わせ、より具体的に、いかなる時に人が「他者」として現れるのかを提示する。このとき問題なのは「他者」という語があまりに様々な対象に用いられていることである。「他者」を巡る議論の混乱の大半は、「他者」という語の多義性に起因するといってもよい。本稿では「他者」を分析概念として用いるために「他人」という通俗的な単語を導入して議論の整理をしたい。

2. 他者性の脱構築の傾向と対策

A. コミュニケーションは「他者性」を否定するか

「他者」の「他者性」を疑う人々として反—相対主義者があげられる[5]。異文化に「理解できない」ことがあるという見解を、彼らは「認識論的アパルトヘイト[6]」と批判する。そして親近性・類似性の指摘によって「他者」の「他者性」を疑問視する。スペルベル[7]は反語的に問いかける。「もし他の文化に住む人々が異なる認識世界（cognizable worlds）に住むというなら、どうやって彼らを知ることが出来るだろう?」ゲルナーは過去においてすべての民族誌家は異なる人々についての報告を必ずしてきたことを「人類学的事実[8]」であると断言する。彼に同意してスパイロはこう結論する。

> つまり、外国人（alien peoples）の「人間の経験」すべてがエスノグラファーにとって理解可能ならば、次のようにしか考えられない。文化・人間の気質や心性は、多様ではあっても、それほどひどく多様ではないということだ（1992：20）[9]。

そして以下の二つの立場を一度に取ることは出来ないとする。

> 要約して言えば、認識論的相対主義者達は、両方を取ることはできない。一方で文化（cultures）は通約不可能であると言いながら、（彼ら自身を含む）民族誌家は外国人の文化と心性を理解できる、と主張することはできないのだ（1992：21）。

だが実際は、両者は同時に成立してもおかしくないはずだ。スパイロが上記の結論を出す際、暗黙に前提していることが誤りを含んでいるため、両方の成立を否定することになってしまうのである。スパイロの

① でも実際はコミュニケーション可能で、理解できる（ので他者ではない）

という反論は、相対主義者が

② 他者（ここでは「外国人」と同義）との差異は明白で、理解不可能である

と考えている、と想定することによって成り立つ。しかも、この両者の議論は、相対主義者と反—相対主義者双方が

③ 他者（ここでは「外国人」と同義）は全ての側面において他なるものである。

という前提を受け入れていないと成り立たない。だが大前提となる③自体に間違いがある。ここでは議論の便宜上「他者」を「外国人」としておこう。外国人と交流するとき、われわれはいくつかの差異に驚くと同時に、類似性にも驚く。外国人だから違うだろう、と想像していたにも関わらず類似性があるため驚き、人間だから同じだろう、と考えていたために差異に驚くのだ。類似性のある点から無

難なコミュニケーションが始まり、「失敗」を通じて外国人とのコミュニケーションは、より誤解の少ない状態で行われるようになる。コミュニケーションは、誤解があってもそのまま成立しうる。ミスコミュニケーションとして、互いに違う意図において同じ接触をすることは可能だ。逆に例えば他者＝外国人でなければ、自国民同士なら必ず全てを理解できるだろうか？同じ市町村出身なら？家族の成員なら？こうした近い人々同士でもある面においては知らない、理解できない点がある。自己や自文化（と呼べるものがあるとして）が全てにおいて自明である、といえないように

③ 他者（ここでは「外国人」と同義）は全ての側面において他なるものである。

とはいえない。よって

① でも実際はコミュニケーション可能で、理解できる（ので他者ではない）

は

② 他者との差異は明白で、理解不可能である

への反論にならない。コミュニケーションの成立は「他者」の否定にはならない。②も③もコミュニケーションや理解が可か不可かのどちらかしかないという考えに囚われている点で同じコインの裏表である。人間同士には「分かることもあれば分からないこともある」という、ありきたりだが重要な事例によって①②③に反論できる。初めは「分からないこと」でも慣れによってコミュニケーションに支障をきたさないようにはできるし、「理解」によってある程度は飼い慣らすことも可能である。

B. 心情理解と知識理解はいつも同時に成り立つか

「他者」にまつわる議論に繰り返し登場するのが、「理解」によって「他者」という認識が解消される、という考えである。「理解」という語は、知ること＝知識「理解」と、共感＝心情「理解」という二つの意味を含んでいるが、特に断りがない場合、その双方が相互に成り立つことを前提していると考えられる。

再びスパイロをあげよう。"Anthropological Other or Burmese Brother?"という題名からも予測できるように、彼は"Other"＝「他者」は近くて親近性があることの対極にあり、全く異なった思考を持つよそよそしい人々を指すかのように書いている。

> 西洋の人類学者にとって、…（略）…少なくとも二つの動機に関して、ビルマ人は「兄弟」（"Brother"）であって「他者」（"Other"）ではないことを示す。つまりある場合や領域においてビルマ人行為者達は、西洋の行為者同様、合理的で実利的・心理的な利益計算に基づいて行動し、別の場合や領域については、西洋の行為者同様、非合理で感情に基づいた動機によって行動する。その上これらの動機は、本質的に自覚されている（1992：p.xvii）。

ビルマ人は西洋人と同じように、ある時は合理的な利益の探求に

基づいて行動し、ある時は非合理的な感情に基づいて行動する、という指摘はもっともである。だが問題は、それが第一文の他者（＝理解できない人々）ではなくて兄弟（＝同類で親しい人々）の根拠にはならないということである。この第一文は次の前提を含んでいる。

⑤ 互いに親しければ、正しく相手を知ることができる。

これは以下の考えを反転したものはないだろうか。

④ 無知は偏見を生む。逆に知ることによって、人々は互いに親しくなる。

だが、これもある程度までは当てはまるが、常に真ではないのは明らかである。知っているからこそ嫌う例は実際にはいくらでもある。親しいからこそ相手を厳密に知ろうとしなかったり、知る事ができないことも同じく多い。

3. あるカテゴリー名を「他者」と呼ぶ問題

A. 差異の政治学：不平等のため？

近年の「他者」をめぐる議論の中で、例えば読者である（日本語で書いてあれば）「（私たち）日本人」と違う被調査者を「他者」と総称することに対し、以下のような問題が指摘されている。

…（略）…他方で、この「他者」の概念は今日、その根底から揺るがされつつある。世界の各地域に余すことなく及んでいる政治・経済・社会・文化的変容のメカニズムは、民族誌家がフィールドで直面する現実から他者性を著しくそぎ落としつつある。今日の民族誌的現実は、ますます「我々」自身が住む現実と何かしら「似た（similar）もの」になってきており、それは「異なる（different）もの」として語ることは可能でも、「他なる（other）もの」（つまり「我々」の住む現実とは全く別の現実）として語ることは、次第に正当化しにくくなってきているといえる。…（略）…民族誌家が依然として「他者」について語ることは、好むと好まざるとに関わらず、「彼ら」を永遠に「彼ら」の位置に押しとどめておこうとする抑圧的な政治行為となりつつあるのである[10]。

以上のような「他者」概念の批判は、人類学に対して、また人類学内部で起きた他者性の構築に対する批判、言いかえれば「他者の他者化」への批判から生まれてきた。『オリエンタリズム[11]』以後、『文化を書く[12]』、『Time and the Other[13]』などが民族誌の操作性、時には虚構性、及び表象の政治性を明らかにした。グプタとファーガソンは、さらに「他者化の政治学（a politics of otherness）」は表象の政治学に還元できないところに存在すると指摘し、移民現象の場を例としてあげる。

…（略）…文化的差異が構築され保持されるのがすでに空間的につながりのある（spatially interconnected）世界での権力関係の場

であると認識すれば、移民の制限は権限のない人々（disempowered）がその状態にとどめられるための主な手段であるということが見えるようになる。……文化的・空間的な分割を脱自然化するという人類学的な責務は、この点において、まさに文字どおり『空間的なネイティヴの具体化』（アパデュライ：1988b[14]）に抗する政治的責務と結びつく（1997：46-47）[15]。

彼らの主張は、以下のように単純化される危険性をはらんでいる。

⑤ 差異（ここでは＝他者性）は政治的不利益のために作り出されるさらに⑤の逆のテーゼ

⑥ 本来、人間の間に差異はなく、作り出されたものである

も相互に成り立つかのように見える。しかし、不利な差異が作られ、固定化される状況が実際にあっても、差異が常に「他者」化につながり、抑圧と不平等を成立させる要因になるかのように一般化はできない。ここで非難されている「他者化」は「周縁化」と同じ意味だと考えられるが、「他者化」を行うのは、政治的に優勢な側だけではないし、政治的な意図だけが作用しているのではない。「周縁化」は様々な「他者化」のなかの一側面に過ぎない。だが最近は特にアメリカで、政治的な正しさの追求のために⑤と⑥を前提とした研究が増加する傾向にある。結果として「他者」は容易に「他の人々」、つまり「社会的少数者」と同一視されがちだ。こうした「他の人々（others）」の「差異」への不寛容が「他者」化の原因と想定されるため、多文化主義や複数アイデンティティの認識がその処方箋とされる。しかし、差異は必ずしも「他者」を生むわけではなく、多様性の提唱によって消え行くものではない[16]。

以上で見てきたように、近年はエキゾチックな構築物としての「他者」を脱構築することに熱心なあまり、「他者性」や「差異」を、悪しきものとして退けようとする傾向も出てきている。彼らは調査者―被調査者や多数者―少数者の差異および「他者性」を抹消することによって、両者の政治的不均衡を是正しようとしている。だが、それはかえって調査者・被調査者や多数者―少数者の二分法を強者・弱者の二分法として固定化することにつながりかねない。二分法された中身を同質化したら、残るのはその境界だけなのだ。

この二分法に陥らないためには、「他者」概念を否定するのではなく、いつ・誰が・どんな時に、誰にとって「他者」として現れるのかを再検討する必要がある。同時に、「他者」をめぐる議論の混乱が、実はこの一語の広すぎる意味内容によるものだと認識することも有効である。「他者」・「他なるもの」は「似たもの」になることによって消えゆくものではない[17]し、必ずしも解消できるものではない。この論文では構築から逃れるものを「他者性」と考えるからだ。以下で「他者性」と「他者」を再考したい。

B.「他者」概念の反撃

他者の他者性をなきものと前提するポストモダン・ポストコロニアルの潮流に対して、1995年にドイツで行われた学会を基に編纂された"ANTHROPOLOGY AND THE QUESTION OF THE OTHER

[18]では反論を加えている。クロウェルは"There Is No Other"[19]で、他者（the Other）は「何かと違う」ことやアイデンティティがそこにあるように想定できるものではないとしている。

ここにメタ述語「差異（difference）」が浮かび上がるが、これもまだ根源的他性（radical alterity）とは言えない。なぜならaがbとは他なる（other than）（i.e異なる different）と言うことは、まだその下に隠れたアイデンティティを想定しているからだ。他者（the Other）は理論のために存在するのではない。そこ[理論の内部：筆者注]には他者はいない。理論は他者性（otherness）を、ただ同一性の中の差異（difference-within-sameness）としてしか捉えることができないのだ（1998：18）。

タイラーも"Them Others- Voices without Mirrors"[20]で他者について同様の指摘を行う。まず先述した、「他者」を解消すべきものとする人々の考えが凝縮した文があげられる。

我々は他者(the other)を解放し、彼らをあるがままにしなければならない。他者の差異を感じ取り、彼らが自分たちの文化から自ら距離を取ることができるようになるように。初めは著しい差異を感じる。それに対する挑戦は、奇妙さ・不慣れさ(strangeness)を我々の人生の一部と置き換え、差異を理解可能なものにしていくことだ。我々に親しみのあるものと関係づけてとらえ、言葉にしていくことで（given a linguistic shape）それは恐ろしくて当惑させるようなものではなくなる。努力（struggle）は限られた視野からの解放に対してではなく、他者をゆがめることなくとらえること（englobe）ができるようなより広い理解に対してなされる。[21]

次に、上記の考えと対照的な以下の文章が対置される。

最悪なのは理解である。センチメンタルで無意味だ。真の知識とは、まさに他者に関して決して理解できないことであり、その知識とは他者にあって、他者をある一人の人間足らしめないものである(what is in the other that makes the other not oneself)。それは私たちによってアイデンティティや差異として定義されていないものだ[22]

そして前者の考えは「他者」の価値を、その存在そのものにおいてではなく、主体の客体としてしか認めないことだと批判する。後者の「他者」は、主体のためではなく、ただ、存在しているのだ。タイラーによれば、我々は「特定の他者：the other」について何かを言うことは出来ない。

なぜなら他者（other）は特定の、そして統一性を持ったものではないからだ。それは根絶できない複数の特異性であり、them

othersなのである（It is ineradicably a plurality of singularities - them others）。我々は彼ら(them others)を理論化し(thematize)、彼らについて語ることは出来ないが、彼らに関する我々の語りを、語ることは可能である。彼らについての我々の語りを理論化することは出来るし、その理論化について話すことは出来る（Tylor, 1998: 32）。

クロウェルとタイラーが共通して言おうとしているのは要約すれば次のようになる。

⑦ 他者（other）について事前に何かを言うこともできなければ、全てを知ることも出来ない。他者の根源的他性は現実の他者に会うことによってしか出会えない。他者は特定できるものではなく、ゆえに、差異やアイデンティティを持ったものというわけではない。他者は事前に予測不可能な、そして理解しがたい残余である。

この他者について厳密な「定義」をしてもあまり意味がない。そのような論理による特定化を逃れるものが、彼らの言う「他者」だからだ。⑦は、一見すると、「他者」の「他者性」を構築し、固定化した「他者の他者化」と同じような発想に見えるかもしれないが、実は全く異なる。「他者の他者化」を行った人類学者は、ある人々を「他者」として対象化し、彼らにあるはずと想定した「他者性」を見つけた。人類学者が自らの「他者」として、自分の姿を鏡に映して反対に映った姿…鏡像（逆像）を描いていただけではないか、という疑問がなされるようになったのは[23]、あらかじめ「我々とは異なる他者」を発見することが対象と出会うより前に決まっていたからだ。これに対しタイラー達は、他者はそのように特定化して予測できないものを指すとする。つまり⑦の他者（other）とは「他者性」によって初めて現れる「他者」のことを指しているといえる。しかしこのままでは同じことを表現しているように聞こえてしまうので次節で様々なものを指すotherを、別の語で言い換える。

逆に「他者の他者化」を批判したいわゆる「ポストモダン人類学」は、論理的にテキストや概念の脱構築を行った。「他者性」の概念はフィクションとされ、対話や認識の変化によって解消できるはずのものと考えられた。だが、クロウェルはそこには「他者」がいない、という。

> 多分驚くことではないかもしれないが、私はこの（radical alterity＝根源的他性：引用者注）起源を他の人間（another human being）つまり他者（the Other）との出会いに位置づける。これが意味するのは、根源的他性は「三人称」的な探求の形態（或いは理論）のコンテキストには表れないということである。そこには他者がいないのだ。我々が社会性の「一人称的」な側面に関して哲学的考察を行っても、もし認識論的・解釈学的な事柄のみに焦点をあわせ続けていれば、根源的他性の兆候は現れない。

根源的他性の観念は、他者（the Other）との倫理的出会いの輪郭（概念）に表れるのだ。（Crowell 1998, 13-14）

クロウェル・タイラーは、哲学的な思索だけでは、他者のradical alterity:「根源的他性[24]」にはけっして巡り合えず、実際の人間である「他者」と出会うことによってしか見出せないとする。彼らの視点では、文化的・非時間的な他者をエキゾチックに構築した人類学者も、他者性が本来ないと前提する人類学者も、どちらもその予想からはみ出たりずれている部分をとらえず、「他者性」の内容を自己の姿から類推する点でまたまた同じコインの裏表なのである。

C.「他人」と「他者」

「他者」には予想不可能な部分と、知っていても理解不可能な点がある、という考えは説得力があり、実際の事例分析にも有効である。だが一番問題なのは、「他者」という語が何を指すかが分かりにくいことである。Otherという語が複数のものを指すためだ。今までこの論文で挙げた英語のthe other, Other, the Otherだけでも、それぞれが様々な「他者」をバラバラに指していた。大文字のOtherを「我々西洋人」にとって理解不可能なよそよそしい人々の総称のように用いているものもあれば（スパイロ）、"the Other"を実際の人間として書くものもある（クロウェル）。箭内はotherを「『我々』の住む現実とは全く別の現実」としての「他なるもの」としているし、タイラーはotherとは the other＝特定の誰か、ではない、としている。他者には「他者性」があるとされるが、これもotherness, alterity, radical alterityといったいくつかのバリエーションがある。「他者」が「現実にいる（自分以外の）人間」であれ「自文化以外の人間」であれ、具体的にどういった時に、どの程度「他者」なのか、ということを表現できなければ、人類学的事例を考察するには不十分である。この論文ではその条件自体に問題があるのではなく、「他者」という語が異なる対象を表すことによって混乱が起きていると考え、別の語による言い換えによって整理したい。

まず、「他者」にまつわる言いまわしのいくつかを否定しておく。自己以外は全て他者である、という哲学やポストモダン人類学に見られがちな前提は、人類学的な事例の分析に適さないため、除外する。ポストモダン人類学者はこの「他者」観を否定しようとしながらも、それを強化してしまう。西洋（WEST）以外（REST）をすべて他者「OTHER」と表象するのも、同様である[25]。非西洋人の我々はこの表現を使えないし、その誤りにも気づかざるを得ない。

さらに「マイノリティ」や「他国籍・他民族の、ある――人や――族」をその条件だけで分析者が「他者」と表現することも無用な混乱を招く。箭内の言うような政治性があるだけではない。「他者」との線引きは日常生活の中で、普通に行われている。ところが、それをある民族名や国籍名と一致させて表現してしまうことによって、その線引きの可変性が見えにくく、また表象しにくくなってしまうからだ。例えば「在日朝鮮人」「日系アメリカ人」に関する論文では以下のように「他者」が用いられている。

「彼ら（引用者注：在日朝鮮人）は日本人が自分とは違った目で見ていると感じることにより、日本人が自分とは違った人間であると思ったりしない。彼らは、自分たちが彼らと違う、自分たちの方が異邦人であると思うのである。彼らは、日本人の目で他者である自分を見ているのである。」（1996: 248）[26]

「日系人」の「人種」と「他者」境界の変容について、少し長くなるが引用しよう。

「『人種』概念が最も明瞭に表出するのは、他者を排除する時なのである。しかしこれはその境界が変化しないことを意味するのではない。…（略）…境界はきわめて恣意的に変化する。『他者化』された者の成員性は人種の境界を超えることはできないが、要は、誰を『他者』とするか、誰を排除する対象とおくかであり、その関係によって境界は変わりうる。」（1996：266-267）

「『ハクジン』はモデルでありかつ他者化された抑圧者の意味を持つが、それに加えて三世の日々の実生活における白人アメリカ人との接触や交友関係は、他者ではない、自分を取り巻く身近な存在である。他の三世から『完全にアメリカ人化している』と評される三世でも、白人アメリカ人の親友を持ち、人生のパートナーとなっている一方で、『ハクジン』の人種差別主義を痛烈に批判し嫌悪する。彼らにとって行動的側面や構造的側面における主流社会への同化と自らのエスニック・アイデンティティは必ずしも同次元にはない。他者としての『ハクジン』と他者ではない白人が共存しているのである。」（1996:282-283）

「他者は白人人種差別主義に象徴される『ハクジン』であり、必ずしも白人そのものを他者化してはいない」（1996:284）

そして「アジア系アメリカ人アイデンティティ」が生まれることによって

「中国系の例に象徴されるように、かつて他者であったものがある次元の自己の境界の内側に同居する存在となった」（1996:285）[27]

上記の例が示すように、あるエスニックグループ：「――人」は、「他者」として現れる時もあれば、そうでない時もある。このように指摘することは重要だ。問題は時に、分析者が単なる「ある人々」を表す語としても「他者」という語を使うことである。この場合、それが単なる「ある人々」「他の人々」を表していても、そこに何か「他なるもの」「他者性」があらかじめあるかのように聞こえてしまうのだ。ある人々にとって、別の人々に「他者性」があるとされている場合に限って分析用語として「他者」を用いるために、「他人」という日常語をここで導入したい。本稿で「他人」は、単に「他の人」という意味で用いる。「赤の他人」と言う時の意味は含まない。上記の例を使えば、「他者ではない白人」や「白人そのもの」は、ただの「他人」なのだ。在日朝鮮人の子供は、自分が朝鮮人だと知らされることによって、それまで単なる他人同士の関係だった日本人に対し、自分を彼らの「他者」として感じるようになる。アメリカの日系人にとって、中国系アメリカ人が自己の境界の内側になったという時、彼らは「自己」になるわけでなく、「他者」との境界によ

って現れる「われわれ」側の中の「他人」になる。竹沢のように「他者化」が必ず排除につながるとは言えないと思うが、「他者」の境界は可変的であり、境界は誰を他者として意識するかによって決まるとは言ってよいだろう。私の言葉で言えば、他者性が現れることによって、他人を他者とする境界が現れるのだ。「他者」をこう定義しよう。

⑧「他者」は「他者性」の現われ(認識)によって初めて想像される抽象化された「彼ら」他人の集合である。「われわれ」は他者との対比によって想像される。他者性とは彼らを「われわれ」として含め得ないものとして想像させる予測不可能な、あるいは理解しがたい残余である。

これは他の人間である「(another human being ≒) other」と、既存の概念や予測をすり抜けていく「残余としてのother」の言い換えである。

「(another human being ≒) other」＝「他人」
「残余のother」＝「他者性」「他なるもの」

と置きかえれば、前者が必ず後者を意味してしまうかのように聞こえるクロウェルらの議論を、より厳密に表現できる。「他人」の集団が必ず「他者」として表れるわけではない。他人は、「他者性」によって「他者」として想像されるのである。「他者性」が個人の特異性として限定されれば、それはその個人の性質としてだけ理解される。だが「他者性」がある人々に共有されるものと考えられ、「他人」がその一部として想像される時、彼・彼女は「他者」と見なされる。⑧によって現れる他者との境界(他者境界)は、その時の視点やテーマによって現れるものが異なる。通常一度に一つの境界しか行為者に意識されず、その境界に基づいて他者が語られる。他者境界は可変的である。ある一つの境界も固定的ではなく、消滅する可能性もある。境界は名があるものも、ないものもある。既存の名のあるカテゴリー間の境界と他者との境界は必ずしも一致しない。だが、既存の名のあるカテゴリー間が他者境界として意識されることもあれば、他者境界がしばしば語られ、名づけられることによって、固定化されることもある。すると、ある異なるカテゴリーの人々が他者性を持ったものとして本質主義化される。ここに一方的な権力関係が絡む時に「オリエンタリズム」的な他者構築が起こる。他人が他者として認識され、語られ、固定化されるのは、以上のような複雑なプロセスを経た後である。にも関わらず、「他者性」の認識を、権力を持った表象する側が、被表象者(≒被植民者)を「他者」化する政治学だとして非難しても、すべてが同じ物語に回収され、既存のテクストの言説を強化するだけで終わってしまう[28]。「被植民者たちを表象＝代弁すること：人類学の対話者」で、サイードが行う人類学・帝国主義批判がよい例である。『オリエンタリズム』のサイードが指摘したように、生々しい現象を捨象して既存の類型やカテゴリーに還元しないためには、他人に出会い、人類学者・表象者をも含めた人々が、誰を・いつ・どんな場合に他者と見なすのかに

ついての言説を注意深く追い、常に既存の枠組みや論理を逃れていく「他者性」「他なるもの」をとらえるプロセスを放棄しないことが必要である。

3.「他者」と移民研究

移民研究は人類学の見直しによって盛んになった。ここでは「他者」概念と移民研究の問題設定について考察したい。

「移民」「エスニシティ」「在日外国人」「ディアスポラ」「出稼ぎ労働者」「定住外国人」「難民」…移民を表す言葉は様々にある。しかも、それぞれの語が異なる「意味」を持っている。この論文で注意を促したいのは、上記の語が「他の人々」を示す言葉、つまり「われわれとは違う」ことをもとにつくられた「他者」を表す言葉群だということである。それは「われわれ」から「名づけ」られたものであり、「意味」も名づけた側によって付加されたものだ。それが正しいか否かは問題ではない。問題は、「われわれ」との関係を示したはずのこの語群が、彼らの属性であるかのような印象を与えがちなことだ。しかもそれが「他者」カテゴリーであるにも関わらず、彼らが名乗った「われわれ」カテゴリーであるかのように「われわれ」は想像しがちだ。

また注意しなくてはいけないのは、「名」のある集団に対して個々人の帰属意識（例：「私はベトナム人」）や、共通性があったとしても（例：在日ビルマ人のほとんどが高学歴）、それが必ずしも「われわれ」としてのアイデンティティを意味するわけではないということだ。語る相手が他の名を持つ集団である時、彼らは「われわれ」としてその集団名を名乗るかもしれない。だが、それは集合的アイデンティティを示したことにはならない。移民「内部」でのまとまりのなさが「分裂」や「争い」に見えるのは、初めから無いところに集合的アイデンティティを、見る側が想定していることによる可能性が大きい。「移民」にまつわる語が常に他者カテゴリーでしかなく、常に自他の区別はカテゴリーと一致しない、というのではない。自他の区別の重要性や名の重要性が、個々の事例によって異なることと自体が考察の対象とされるべきなのである。

カテゴリーは便宜上、研究対象を定め、一定の傾向を探る上で必要なものである。だがカテゴリー化は一つの名のもとに、内部の差異を忘却することによって行われる。移民研究が常に人類学者に考察を要求するのは、名がない境界、現れては消える境界、カテゴリーや定義からはみ出してしまうものの存在である。彼ら自身には重要でない「名づけ」られたカテゴリーが一人歩きしたり、「名乗り」のカテゴリーとなったり、逆にカテゴリーが抑圧を生むような状況などを見落とさない様にしなければいけない。その説明に新たな名づけ（カテゴリー化）をすることも時には必要だが、この名づけも何かを忘却することによって行われる。人類学は、研究対象を限定しながらも、そこに収まりきらないものをもとらえようとするため、カテゴリー化とカテゴリーの疑問視を絶えず繰り返すことを余儀なくされる。

注

(1) もともとビルマ語では「ビルマ」（口語）・「ミャンマー」（文語）ともに同じ意味で使われていた。が、前年に民主化運動を武力弾圧した軍事政権（SLORC）が1989年に対外国名を変更したため、反政府側を中心に「ミャンマー」の使用に反対する者も少なくない。ビルマ・ミャンマー研究者の間でもどちらを使用すべきかに関しては意見が分かれる。在日ミャンマー国籍人の大多数は、日本語でも「ミャンマー」を使用している。だが私のフィールドワークのキーインフォーマントが「ビルマ」を使用していたので、ここでは一般的な総称として「ビルマ」を用いる。

(2) Tamura, Katsumi "Intimate Relationships in Burma" The Centre for East Asian Cultural Studies Vol. XXII 1993 pp.11-36、田村克己「人とつきあう」『アジア読本：ビルマ』河出書房新社、1997年、pp.120-126にビルマ本国における「親しい（キン）」関係の重要性があげられている。「親しい」関係は一個人同士の間で結ばれる個人的二者関係であり、「グループ」としての関係ではない。

(3) ビルマ人がグループ内やグループ間の統一を欠くことは、しばしば指摘される。ここでいう線引きは、必ずしも統一性の欠如や競争と同じ意味ではないが、それとの関連を類推させるに十分なほどである。民主化運動における学生団体や政党の多数乱立・内部分裂に関してはアウンサンスーチー『アウンサンスーチー演説集』みすず書房1996年、Lintner, Bertil. *Outrage: Struggle for Democracy*, Review Publishing 1989、伊野憲治「ミャンマー『民主化』運動における民衆行動の諸特徴」『北九州大学法政論集』第二二巻第一号1993年、藤田昌弘『誰も知らなかったビルマ』文芸春秋、1989年、など。主な理由に挙げられるのは、個人的確執、人間不信、リーダーシップ争いなどであり、イデオロギー対立ではないという見方が一般的である。歴史に常態のように現れるリーダーシップ争いに関しては田村克己「王権と『叛逆』：ビルマの王権」『王権の位相』松原正毅編、弘文堂、1991年、pp. 173-193および田村克己「『伝統』の継承と断絶：ビルマ政治のリーダーシップをめぐって」『現代の社会人類学3国家と文明への過程』伊藤亜人・関本照夫・船曳健夫編、東京大学出版会、1987年、pp.83-106

(4) 例えば、太田好信『トランスポジションの思想：文化人類学の再想像』世界思想社、1998年

(5) 浜本満「文化相対主義の代価」『理想』1985年8月No.627pp.105-121および「差異のとらえかた：相対主義と普遍主義」岩波講座文化人類学第12巻『思想化される周辺世界』1996年 pp.69-96を参照

(6) Sperber ,D.. "Apparently Irrational Beliefs" in *Rationality and Relativism*, M. Hollis and S. Lukes, eds., 149-180, Cambridge, MA: MIT Press , 1982.

(7) ibid ebd. Sperber ,D. 1982, p.157

(8) Gellner, E.. "General Introduction: Relativism and Universals." in *Universals of Human Thought*, B. Lloyd and J. Gay, eds., 1-20. Cambridge: Cambridge University Press. 1981, p.5

(9) Spiro, Melford. *Anthropological Other or Burmese Brother?: Studies in Cultural Analysis*. New Brunswick: Transaction Publishers, 1992

(10) 箭内匡「『他なるもの』から『似たもの』へ：未来の民族誌にむけて」『民族学研究』1994年、59/2、pp170-171

(11) サイード、エドワード『オリエンタリズム』上・下、平凡社、1993年

(12) クリフォード・マーカス編；春日直樹［ほか］訳. 紀伊國屋書店、1996年、岩波書店

(13) Johannes Fabian, Time and the Other, Columbia University Press, 1983

(14) Appadurai, Arjun.1998 "Putting Hierarchy in Its Place." Cultural Anthropology 3(1): 36-39

(15) Gupta and Ferguson 1997 "Beyond 'Culture': Space, Identity, and the Politics of Difference" in Culture, Power, Place. Durham, Duke University Press 1997, pp.33-51

(16) Spinosa and Dreyfus "Two Kinds of Antiessentialism and Their Consequences" *Critical Inquiry* 22 Summer 1996: 735-63における多文化主義の提唱に対する反論、
Tim Dean "Two Kinds of Other and Their Consequences" *Critical Inquiry* 23 Summer pp.910-920を見よ。ディーンはラカンの精神分析学の立場から「他者（Other）」を差異やカテゴリー、具体的には性的・社会的少数者（social and sexual minorities）である「他の人々（others）」に還元することに強く反対する。これは社会的な他者化（social othering）、つまり周縁化（marginalization）だが、この意味で「他者（the Other）」を用いると、カテゴリー・類似（相違）の定義・自他の区別などに収まらないもの（other Others）を見逃すことになってしまうためである（p.912）。本稿も後に同様の主張を異なる側面から展開する。

(17) 箭内は「他なるもの」を単に「異なること」とは違うとしている。だが、人々が「似たもの」になることによって、もはや「他なるもの」ではない、とするのは、他なることを「非常に異なる」こと…つまり差異の大きさとして考えているように受け取れる。この論文の立場では、「他なるもの」＝「他者性」とは類似や差異の範疇に属するものではなく、そのどちらをも裏切るものに、事後的に示すものである。

(18) PAIDEUMA (44):1998 Frobenius-Institut E.V., Franz Steiner Verlag/ Stuttgart,1998

(19) Crowell, Steven. "There *Is* No Other: Notes on the Logical Place of a Concept" PAIDEUMA (44):1998 Frobenius-Institut E.V., Franz Steiner Verlag/ Stuttgart,1998:13-29

(20) Tylor, Stephen. "Them Others- Voices without Mirrors" PAIDEUMA(44):1998, pp.31-50

(21) qtd. in Tylor, Taylor, C. 1990 "Comparison, History, Truth" in *Myth and Philosophy*, F.E. Reynolds and D. Trang (eds.) Albany, New York: SUNY, pp.41-42

(22) qtd. in Tylor Baudrillard, J. 1993 *The Transparency of Evil, London*: Verso (Baudrillard:1993: 148)

(23) 今村仁司「人類学の認識論的諸問題」『現代思想』1998年6月号pp. 60-67

(24) この論文では「他者性」と同義とし、以下では「他者性」のみ使用する

(25) 例としては、Bowman, Glenn "Identifying versus identifying with 'the Other': Reflections on the siting of the subject in anthropological discourse" in *After Writing Culture: epistemology and praxis in contemporary anthropology*/ eds. James A., Hochey, J., and Dawson J. 1997 London Routledge pp.34-50

(26) 浜本まり子「在日朝鮮人：在日朝鮮人のアイデンティティの問題」岩波講座文化人類学第7巻『移動の民族誌』青木保他編1996

pp.233-262

(27) 竹沢泰子「『白人』と『黒人』の間で：日系アメリカ人の自己と他者」同書pp.263-292

(28) サイード、エドワード『現代思想』1998年6月号、pp.72-91

Who is the "Other"?: Rethinking and redefining the "other" through immigrant studies and philosophy

Sachiko TANUMA

The idea and construction of the "other" has been criticized in Anthropology.
It came to the point where some anthropologists would argue that otherness is the result of power relations and that we must denaturalize and deconstruct otherness. This paper reexamines what such anthropologists think about the "other" and "otherness" and calls their premises into question.

There are also recent critiques from some philosophers toward postmodernism which argue that "there is no other" in postmodernist studies. Using their idea of the "other" and examining the usage of the term the "other" in recent immigrant studies in Japan, I will redefine this term using the colloquial Japanese term "*tanin*," which simply means "another human being." This enables us to use "*tasha*" as a term for social analysis. The word "*tasha*" itself has an unfamiliar, abstract nuance. Confusion arises when people use this term to mean anyone but "oneself," people other than "us," people who are marginalized, people who are studied, and so on. This paper suggests using the word "*tasha*" only when there is otherness felt and mentioned towards others by someone. The boundary of otherness between other and self is seen only from one place and time. Seen from different point of views and occasions, different boundaries will be perceived by the same person. Such differentiation cannot be reduced to mere political strategies. Rather, the "politics of otherness" is just one aspect of a complex process by which we perceive an "other."

Key words

the other, "Other," "migrant," boundary, named or not